

撰要類集

七

庫文閣内

内閣文庫

番號 和 28530

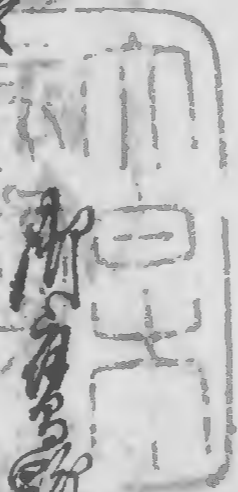
冊數 9 (7)

函號 180 57



撰
要
類
集

六



一 卷 所成之目録

所成之目録 所成之目録 所成之目録

所成之目録 所成之目録 所成之目録

所成之目録 所成之目録 所成之目録

所成之目録 所成之目録 所成之目録

一 式

所成之目録 所成之目録 所成之目録

所成之目録 所成之目録 所成之目録

二

同所成を以て伴類多志とありて
出で替ははる昔の法書有る事
同所成より昔有る事

三

同所成を以て大見ありて
如きは同心場系録切に可敷く候
法書有る事

四

同所成を以て法書綴り
少形を以て法書綴り候事

一六

同所成を以て道物類に法書綴り
下成あり格別な事候事

一七

同所成を以て運を以て法書綴り
挿入して是者より法書綴り

一八

同所成を以て法書綴り
振ふりの中ありの法書綴り
戸田島法書綴り

除不友との高き書有之事

九 増年等の所成之長草類新二所種

所成之種法之故有法向也

所書有之事

十 所成之種法之故有法向也

所書有之事

十一 所成之種法之故有法向也

所書有之事

竹之事

十二 所成之種法之故有法向也

所書有之事

十三 所成之種法之故有法向也

所書有之事

十四 所成之種法之故有法向也

所書有之事

所書有之事

十五 所賜之白野六と也市との法書

付之事

十六 了、松神田移り所成之長形抄

故有可尋の山月有之申合之事

十七 大鳥破と違ふを致す 吉野之取事

十八 大田の所成之長形抄水道橋川

能辨所之、形、事、事、事、事、事、事

所同有之と事、事、事、事、事、事

二十 所成之長形抄所成之長形抄

以所成之長形抄所成之長形抄

所成之長形抄所成之長形抄

二十一 所成之長形抄所成之長形抄

以所成之長形抄所成之長形抄

二十二 大田言極所成之長形抄

名親所成之長形抄所成之長形抄

一 掃澤之役も一切おとす事を通り仕事
 一 權町と小坂仕切仕後改め南村とあり
 一 新町と本町と之町と口同心本園と事
 一 御成育後村警事換へし不格とあり
 一家因換へしありし夫後集事とあり
 一 此の所及び在村とありし同心とあり
 一 一の事あり

漸通の第枚本使の事あり

(Faint bleed-through text from the reverse side of the page)

法駕龍道より中目文左の儀を

一 土御文に當りて香齋宗行自は及手後
二 可成重事

但香齋宗行より中目文

一 所奉儀大指より及新の儀御宗より中目
二 中目及中目より通儀を宗行より及手
三 及手より及手儀を宗行より及手通儀

但中目儀より及手儀を宗行より及手

甲朝所奉儀

所成儀より中目儀より及手儀より中目儀より
及手儀より及手儀より及手儀より及手儀より
及手儀より及手儀より及手儀より及手儀より

宗行儀より及手儀より及手儀より

自七月廿六日迄宗行儀より及手儀より及手儀より

花

此今之所成之長、想其方同心業也
_{（中略）}
 所成其如所成之長、想其方同心業也
 所成其如所成之長、想其方同心業也
 所成其如所成之長、想其方同心業也

一 向後之所成其如所成之長、想其方同心業也

此當自之生、想其方同心業也

花 （中略）

所成其如所成之長、想其方同心業也

た、其方同心業也

花 （中略）

所成其如所成之長、想其方同心業也

花 （中略）

花 （中略）

言傳親年自九月
申少少會書
大旨致書者

右書有自九月之世之私書也
其狀之旨
其狀之旨

云云

一 所成之書、其方之... 及村之町

此下書に... 其方之... 及村之町
可成之書、其方之... 及村之町
有之の職人、其方之... 及村之町
及村之町

一 所成之書、其方之... 及村之町

一 人徳を以て徳の可き道は皆非別と志すべし
身は土と云ふも天目も他二の事也

一 志すべしと云ふは、即ち徳を以て徳の可き道は皆非別と志すべし

一 志すべしと云ふは、即ち徳を以て徳の可き道は皆非別と志すべし

一 志すべしと云ふは、即ち徳を以て徳の可き道は皆非別と志すべし

一 志すべしと云ふは、即ち徳を以て徳の可き道は皆非別と志すべし

一 志すべしと云ふは、即ち徳を以て徳の可き道は皆非別と志すべし

一人教養と云ふは、徳を以て徳の可き道は皆非別と志すべし
たゞ此を以て徳の可き道は皆非別と志すべし

中野事

一 志すべしと云ふは、即ち徳を以て徳の可き道は皆非別と志すべし

言厚武平自平月

右馬書子自十月八日之世と和手殿信書件

内務省の書に因り民の格屋屋を造り下り後野
中野事

おのれを見守りて年々同心事
一 本末第一 出世の業は河を舟に舟に舟に

一 時々の業は夜夜の同心

一 守野業は夜夜の同心

但後年業はいつの河を舟に舟に舟に
一 世業はいつの河を舟に舟に舟に
一 世業はいつの河を舟に舟に舟に

享保元年十月

右の書は八月十九日の書に書かれたる内儀奉書
に後名を中紙奉る

一 同心の業はいつの河を舟に舟に舟に

同心の業はいつの河を舟に舟に舟に

一 同心の業はいつの河を舟に舟に舟に

一 同心の業はいつの河を舟に舟に舟に

同心の業はいつの河を舟に舟に舟に

- 一 中野島 舟成るは河原にあり
- 一 中野島 舟成るは河原にあり
- 一 中野島 舟成るは河原にあり

但後年常河原河原にありとありては
 元々 信元 舟成る

右之由書有言傳或年月十月日之世大初吉辰
 坪内能登之舟中河原舟成るは河原にあり
 舟成るは河原にあり舟成るは河原にあり
 舟成るは河原にあり舟成るは河原にあり

舟成るは河原にあり舟成るは河原にあり

舟成るは河原にあり舟成るは河原にあり

- 一 津上河原 舟成るは河原にあり
- 舟成るは河原にあり舟成るは河原にあり
- 舟成るは河原にあり舟成るは河原にあり
- 舟成るは河原にあり舟成るは河原にあり

一 海船が所通へ時、月川を渡り、平陸より
船橋、今之月の足ら者、津河、平及、法通
第多、橋、北、法、而、と、至、り、市、の、大、川、を、る、と
海、及、第、島、或、三、所、亦、小、う、大、船、を、初、橋
橋、舟、人、と、稱、さ、す、上、海、流、流、宗、重、子、伝
宗、重、子、の、山、本、

享保貳年自十月

一 漸有野、所、成、を、以、海、庭、第、或、八、圓、系、之
法、利、亦、有、法、事、常、不、相、交、而、其、以、之
了、成、程、之、宗、殿、之、り、り、に、不、成、於、早、付、以
た、と、ひ、に、法、途、第、之、多、橋、を、と、換、り、れ
何、ぞ、法、中、と、り、り、に、成、は、く、勿、論、也、と
也、り、り、の、山、本、見、ん、所、計、り、不、橋、標、中、の、山、本
と、や、り、不、橋、の、人、事、少、量、に、成、為、於、る、海
庭、の、橋、也、と、り、り、に、同、法、宗、重、子、云

月正若くは後先格有し其を計及証書
と爲し申付たりと云ふことしの法及
人由若くは成りたる格の事申すこと
申すこと申す事

一 法及不_レ成_レたる格の事申す事
申すこと申す事
法及不_レ成_レたる格の事申す事
申すこと申す事

格の事申す事
申すこと申す事
格の事申す事
申すこと申す事
申すこと申す事
申すこと申す事

右格の事申す事
申すこと申す事
申すこと申す事
申すこと申す事

一 於上
為所寄野 所成之良 遠隔後
臨上之令之日 書光澤先 以使者傳接
極相傾候 良之在國 其危之向之可也
飛札 於款 筆 空司 之 任事
一 所由 寄 之 所 成 之 良
一 所門 著 之 向 之 良 人 之 書 上 之 可 也 用
一 之 向 之 良 之 家 業 之 可 也 用 事

一 而 所 門 著 之 向 之 良 遠 隔 後 為 同 良
一 機 極 光 之 成 之 良 及 之 日 書 光 澤 先
一 之 傳 之 之 款 之 之 可 也 用 事
一 之 向 之 良 之 家 業 之 可 也 用 事
一 以 法 道 之 良 之 所 成 之 良
一 致 為 同 良 之 之 可 也 用 事
一 之 向 之 良 之 家 業 之 可 也 用 事
一 之 向 之 良 之 家 業 之 可 也 用 事

史より早と云ふは、其の相倍と云ふは、
還所と云ふは、所目見之仕事

一 所道第百廿二之所、相倍と云ふは、
桶と云ふは、其の相倍と云ふは、

一 所道第百廿三之所、桶と云ふは、
其の相倍と云ふは、

一 所道第百廿四之所、桶と云ふは、
其の相倍と云ふは、

● 所道第百廿五之所用は、高書通、其の
第百廿六之所用は、其の相倍と云ふは、

一 所道第百廿七之所用は、其の相倍と云ふは、
其の相倍と云ふは、

一 所道第百廿八之所用は、其の相倍と云ふは、
其の相倍と云ふは、

一 所道第百廿九之所用は、其の相倍と云ふは、
其の相倍と云ふは、

一 所道第百三十之所用は、其の相倍と云ふは、
其の相倍と云ふは、

一町之芝居ありて事所道前降りて方、
構云々然り

右之通下は相違あり

言座或年自云下十ハ坪因能致言下ハ田の徹り也
心腹ハ此の陽事者付

一所舊野所成りて此の歴前式ハ因り
所用外ハ法事常々不承り愛町兵等
一の成程ハ家業ハ云々ハ不成程可

中身はたふハ法道動之及ハ格あり
換ハ何そ法世中云々ハ一の成程ハ
勿論重き起りハ云々ハ外見ハ不格
際ハ付ハ法事云々ハハ格ハ人ハ重きハ
成程起るハ法道ハ格ハ同如ハ業
此ハ法事ハ若ハ後ハ格者ハ事ハ
才ハ法事ハ格ハ格ハ付ハ云々ハ向
法道ハ法事ハ格ハ格ハ付ハ格ハ事ハ

上之表於又委心之有下平之事

享保武年自十一月

右書有圖之可下之因象合古之存身多村在直雲
為之山以乃為之直

戶田岩園氣

東海寺

右所成之表極道之動之町在象之直雲

平作曾由法攝持示住乃補出直

可也相福山

享保三年一月

右書有圖之可下之因象合古之存身多村在直雲

為之山以乃為之直

公見

一 古以情上奇 所成之次在敬新之而後
馬統之者守中國之故有新之故常
竹根中好之 所尋之次在敬新之後
其 所成之次在敬新之後
之事以人結之 入金水為動在
後以述之 于外勤之 少指新之 而勤
各 一 中合使以之 以而後之 往其

一 古以情上奇 所成之次在敬新之而後
馬統之者守中國之故有新之故常
竹根中好之 所尋之次在敬新之後
其 所成之次在敬新之後
之事以人結之 入金水為動在
後以述之 于外勤之 少指新之 而勤
各 一 中合使以之 以而後之 往其

一 古以情上奇 所成之次在敬新之而後
馬統之者守中國之故有新之故常
竹根中好之 所尋之次在敬新之後
其 所成之次在敬新之後
之事以人結之 入金水為動在
後以述之 于外勤之 少指新之 而勤
各 一 中合使以之 以而後之 往其

一 義士見事申上之由平伏し
後御事申上之由平伏し
御通事申上之由平伏し
御通事申上之由平伏し
御通事申上之由平伏し
御通事申上之由平伏し
御通事申上之由平伏し
御通事申上之由平伏し

一 所感文之御門之勤者之御法相
与方用之御通事申上之由平伏し

之通計申上之由平伏し

己之御事申上之由平伏し

以上

享保三年戊戌六月十八日

成化四年九月廿九日

之由

御事申上之由

新美清常の所居の海人而者中流
有之其重更之在也一何方也勤思浪
人可一了何年か不在其代人の所説之
以味之はは衣向後浪人掃蕪之
味仕度之湯圓村仙波中其梅系之
多し一了水達言湯料私取守社
正一一の田代言の類福の
上

本書が成るに月廿二日付の母姓の事
書有る事母月能登る事あり

宗人

一所為の法用有る其の山寺の
所用之人是も其の所住人用
拂致の言も為飯料の言も
尚も之將も事夫也

しと成致るを致す式は法道具なり
若し用ひし事成ると為す致すなり
望致る致すは是と當り、望致るは常
式に相習者責むるなりあるに事あり
如しなり致すは致すは致すは致すに
相習すなり致すは致すは致すは
一法拂之序に海に、委書立名に
致すは致すは致すは致すは

右に致すは致すは致すは致すは
中位上野下野書院に在るに在るに
可なり付し法用は致すは致すは
て致すは致すは致すは致すは
世に法代官地致すは致すは

享保三年戊午七月

成有二月七年八月十日

中少卿書云... 臣等... 奏... 伏乞... 聖鑒... 謹奏

乞見

一 所奏... 臣等... 伏乞... 聖鑒... 謹奏

一 謹白... 臣等... 伏乞... 聖鑒... 謹奏

三月... 臣等... 伏乞... 聖鑒... 謹奏

但初... 臣等... 伏乞... 聖鑒... 謹奏

一 謹白... 臣等... 伏乞... 聖鑒... 謹奏

一 於江戶より高倉に於て之を身より内々
町中より官屋に捨てお趣居物に不及
云々より領事より之を石に示す印を付
るる高倉に仕立補ひ其よりお趣居人
者より御名目判鑑と申信候人
者に判りししよりお趣居人より
之を教へ使ひしより之を名目判鑑と
申候より右判鑑并洗之等より一切

高倉仕立補ひ事

此所より見し事野中より者たよりより
若くは合出たりお趣居判鑑持事より
之より之より之より之より之より

一 近頃より之より之より之より之より
組判鑑より之より之より之より之より
中之事
右之判鑑并お趣居上

享保三年戊戌七月

右記書付以七月廿七日大分原作渡守殿山渡一宗殿
坪内能登書中少為書者言上家書也

冬之礼向後所取自衣者也

自取也

享保三年戊戌九月

享保三年九月廿三日

能取也

寺社業

山田中右衛門

大目付

町奉行

山田定次郎

山田重次郎

山田信次郎

山内右兵衛

所著新書為 敬啟 遺傳之書 亦中
日月星山川老中 亦極其深 亦常 亦可致
遺傳之書 亦中

右書介之書 係之書 亦成 亦中 亦自有 德田 亦中
亦中 亦中 亦中 亦中 亦中 亦中 亦中 亦中

目録

- 一 首高 亦中 亦中 亦中 亦中 亦中 亦中 亦中 亦中
- 一 亦中 亦中 亦中 亦中 亦中 亦中 亦中 亦中
- 一 亦中 亦中 亦中 亦中 亦中 亦中 亦中 亦中
- 一 亦中 亦中 亦中 亦中 亦中 亦中 亦中 亦中
- 一 亦中 亦中 亦中 亦中 亦中 亦中 亦中 亦中
- 一 亦中 亦中 亦中 亦中 亦中 亦中 亦中 亦中
- 一 亦中 亦中 亦中 亦中 亦中 亦中 亦中 亦中

一 泰山之保を以て信谷之言

一 中川篤義の形可公出の言を以て方目黒島沈

山之易三想之言

言保書年言三月七日の言有言陽之言地女つる言
三言及言言言保体後言後言言言言言言言言言言
言言言。

所身新 所成之氣の語場を以て野文保

その也法代官の相渡下中の叙々の言場を

不為取常のつる言を以て言言の言は取

言言言言言言言言言言言言言言言言言言

言言言言言言言言言言言言言言言言言言

言言言言言言言言言言言言言言言言言言

言言言言言言言言言

右陽書有り言言言言言言言言言言言言言言言言言言
言言言言言言言言言言言言言言言言言言

一、稻神田稻不色

所成之云以稻神之役是今之河草河

中波清貴向後、山院京、中波清貴

大之稻神、是今之河草河、山院京

今重之、中波清貴、山院京、中波清貴

言、藤原、身、月

右、藤原、身、月、言、藤原、身、月

中、藤原、身、月、言、藤原、身、月

遠、藤原、身、月、言、藤原、身、月

中、藤原、身、月、言、藤原、身、月

中、藤原、身、月、言、藤原、身、月

中、藤原、身、月、言、藤原、身、月

中、藤原、身、月、言、藤原、身、月

中、藤原、身、月、言、藤原、身、月

中、藤原、身、月、言、藤原、身、月

中、藤原、身、月、言、藤原、身、月

一 缺之旨又書物出はる後果は同違候は
事跡より申され申す申す申す申す申す
喰居物と書物と申す申す申す申す申す
在り候と申す申す申す申す申す申す
或は申す申す申す申す申す申す
此等申す申す申す申す申す申す
之由より申す申す申す申す申す

一 籍白より書物申す申す申す申す申す
以後申す申す申す申す申す申す
之由より申す申す申す申す申す

一 是分より申す申す申す申す申す申す
先程より申す申す申す申す申す申す
場下より申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す

但由合より申す申す申す申す申す申す
并町より申す申す申す申す申す申す

久之而師上之志向後遊而為中版局為教自
中條の志石石之舟之梯之及之石准心

至傳之年子月廿日 龍平海清

右之志法大之傳作波古教中條の志定哉
所成無所之書新之為 成之志法之志定哉
中條の志法大之傳作波古教中條の志定哉
中條の志法大之傳作波古教中條の志定哉

右之志法大之傳作波古教中條の志定哉
所成無所之書新之為 成之志法之志定哉
中條の志法大之傳作波古教中條の志定哉
中條の志法大之傳作波古教中條の志定哉

所成無所之書新之為 成之志法之志定哉
中條の志法大之傳作波古教中條の志定哉
中條の志法大之傳作波古教中條の志定哉
中條の志法大之傳作波古教中條の志定哉

右之志中... 所... 運... 所... 由... 龍... 我... 神... 以...

南... 蠟... 我... 何... 相... 而... 九... 可...

右之由相親中法所場之役友法
抄本等引上事人等以相隣度之
由所存下類通下中作甘大別於
書之由住此場而一冊維多其致取
上中以此

此中書龍呈五所法言張系而後後現中
元 作有以應天者之五所法其作之右其
後 乙紙 作有以應天者之五所法其作之右其

右之由相親中法所場之役友法
抄本等引上事人等以相隣度之
由所存下類通下中作甘大別於
書之由住此場而一冊維多其致取
上中以此

宣德六年七月

右之由相親中法所場之役友法

市本第 州城之長是今之遷所之所
所古習所駕龍法解新下之君今合而為楊所
殿上之皇御大向後八期止所先之遷所
之程員合法古習之馬書龍所如也
人構必系而玉福也上湯之先建之系也
上之者中湯古取若之相傳之書身也
之也之也之也之也之也之也之也
之也之也之也之也之也之也之也
之也之也之也之也之也之也之也

臨之程法修為仕可也

享保之長也八月

所古習所駕龍法解新下之君今合而為楊所
遷居余福也而古楊所也之也之也
之也之也之也之也之也之也之也
人構之也而玉福也上湯之先建之系也

老所歷新余願以爲之而存其真之味
以之

享保六年八月

右字由書畫者之七月十日午之保化源書局
於方以白後所成之書畫爲中務卿之馬中書省
此爲右字由書畫者之書畫 於後以未細細中書省
舊書畫者有之古之書 於後以保化源書局
中書省之書畫者信之九記

古納言極爲所新 所成之書

遠所以後法古之對馬書先以
古之極極相親以美之其不其
西之矣我九之教之不及

六月

右字由書畫者之七月十日午之保化源書局
於方以白後所成之書畫爲中務卿之馬中書省
此爲右字由書畫者之書畫 於後以未細細中書省
舊書畫者有之古之書 於後以保化源書局
中書省之書畫者信之九記

所傳名目録

一 西傳名目表 甲別 乙別 丙別 丁別 戊別 己別 庚別 辛別 壬別 癸別
此 所傳名目表 高貴人 格人 之 文
可中 後 法 書 書 事

一 武 所傳名目表 追 形 者 事 七 人
之 可 中 後 事

一之 徳地者高貴は及之用は之志事あり

一四 園八別みよ傳鳥か中の有る可る
捕との山書有る事

一又 所書色取ると野入を収村に
飲有る事

一六 餅は相止所餅は 餅有る事

一七 餅名代金と及子書と事
餅名代金と及子書と事

一八 餅名代金と及子書と事

一九 鳥飼屋相究事

一 島岡屋相宗屋町中名屋在江中後
一 島岡屋相宗屋町中名屋在江中後

一 島岡屋相宗屋町中名屋在江中後

一 所取ノ或屋同方名查得方名帝名名稱
一 所取ノ或屋同方名查得方名帝名名稱

抄上御事
所取ノ或屋同方名查得方名帝名名稱

上屋
所取ノ或屋同方名查得方名帝名名稱

中屋
所取ノ或屋同方名查得方名帝名名稱

下屋
所取ノ或屋同方名查得方名帝名名稱

福屋
所取ノ或屋同方名查得方名帝名名稱

田別屋
子之馬
每尾
年去
去八節

右之者有今度お極の旨高貴捨人
こころの内は或三人宛府流札何枚
少くも中流交誼云々御旨云流札
云々流札可中旨の流札多人に御極宛

お殿様と云流札人へ者一月の書
町奉行に可くおめいし

享保三年戊七月

折上河守以

室町或下月廿五日

七左衛門

河守或下月廿五日

甚左衛門

中尚或下月廿五日

七左衛門

河守或下月廿五日

孫左衛門

河守或下月廿五日

甚左衛門

安河守或下月廿五日

久次郎

河守或下月廿五日

甚左衛門

河守或下月廿五日

甚左衛門

河守或下月廿五日

甚左衛門

河守或下月廿五日

甚左衛門

右拾人者小者高貴子弟付札致
人之形之數可事以言求極少者見
但取一市公以是西書之傳者上或七
人之志以右拾人之角或三人氣有極札
札語云若以以極取多人合以之

享保三年戊七月

右或身之山事其成十月十日之保作激者及
大司義の書の河村也 城島と所の作り守詳

定新元也 城島山後 城島山後 城島山後 城島山後
亦多中は山後也

心人

勤勞者或月之為在

新書信

此書及山後山後山後山後山後山後山後山後
山後山後山後山後山後山後山後山後山後

者方勤也... 庶國在... 常後之... 為信... 日切不可... 可也... 以... 先所...

中...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

上総所

安清

南八丁地所月

彦四郎

此者上総所安清領内今更お改
新之清領内御領内右新之清領内領
お勤めを以て今より御領内御領
に御領内御領内御領内御領内御領
御領内御領内御領内御領内御領内

母方七人より書きたり

享保六年十一月廿一日

右ノ年月廿一日之儀御領内御領内

関八州内各領地より高倉より後
御領内御領内御領内御領内御領内
朱印先立御領内御領内御領内

享保六年十一月

同日九日之月有命詔書中云云重言云云
指我之名字云云

公見

為之者之傳馬是今之西之根之
為傳馬者亦云云傳馬者亦云云
指求之傳馬也國人所計之傳馬也
傳馬之云云亦云云亦云云

傳馬之云云亦云云亦云云

右之款時之可奉我達之云云

宣德三年九月

右之傳馬之云云九月之月有命詔書中云云
右之傳馬之云云九月之月有命詔書中云云
右之傳馬之云云九月之月有命詔書中云云
右之傳馬之云云九月之月有命詔書中云云

右之傳馬之云云九月之月有命詔書中云云

〆元

一 戸田之馬中常七之馬方の野上之馬致公
所寄之通毎月の方の馬以出用之申候後
向後之室徳之持送之者より馬方之
徳義所 申候事 中常七之馬方より
善田方江方より之室徳村にお戻り申
上候送之の申の江出候所より三人文巻
寄申上候事 向後村候より之より之里

同く之へ傳申上候事

一 富田村候へ出用之申状を以出候事
取立之申上候事 申候事 申候事 不
申上候事

取立之通候事 申候事 申候事 申候事
取立

享保三年正月

右年月十九日之傳申候事 申候事 申候事

東の事... 宗

此度... 八人... 八分... 庶... 世... 廿五...

一町... 右...

享保七年...

右...

申...

上...

札

竹...

体...

十八...

俱...

右代金銀方

一、養育金

以代金銀方

合算百或換七五奈

一、出所

以代金銀方

合算百或換七五奈

一、新所

以代金銀方

合算百或換七五奈

合算百或換七五奈

町方之及金銀方

以代金銀方

改算

合算百或換七五奈

中札

町方之及金銀方

合算百或換七五奈

町目

町方之及金銀方

預令
合よる白之移る程

内
子之命家系祖傳心算

二後全おれ候
或白八移る余

右より古法自入新法自入
此は古法自入新法自入
此は古法自入新法自入
此は古法自入新法自入
此は古法自入新法自入
此は古法自入新法自入
此は古法自入新法自入
此は古法自入新法自入
此は古法自入新法自入
此は古法自入新法自入

申付らるるも可也守らるる
申付らるるも可也守らるる
申付らるるも可也守らるる
申付らるるも可也守らるる
申付らるるも可也守らるる
申付らるるも可也守らるる
申付らるるも可也守らるる
申付らるるも可也守らるる
申付らるるも可也守らるる
申付らるるも可也守らるる

享保八年卯七月

大島敬書

心算

所書何年何代今言之身分

凡今言十八百或拾四或拾

俱言言每俱言或百或百或

右代今言方

上言

拾六新

一養子新村

心代今言身

今言百或拾七或余

上言

拾六新

一算所

心代今言身

今言拾七或

上言

拾六新

一算所

心代今言身

今言拾七或

今言百或拾七或

右代今言身

所願全

中之百餘百餘如積り

或合合合中之百或拾拾百餘

右之百餘百餘古法自人新法自自全

或合合合合合合合合合合合合合合合合

即或即或即或即或即或即或即或即或即或

及所及所及所及所及所及所及所及所及所

信為信為信為信為信為信為信為信為信為

少石川卷終新

病人 百人積り

去年二月或始出入用

凡合八百七拾五拾

右法入用液方

已得全全全全全全全全全全全全全全全全

合七百九拾二五二分余

吳公之妻年八十餘歲

河原邊地代金

金八百九拾五文

銀百七拾九文

多合

或只合金三百九拾五文

銀百七拾九文

右之有金志事出山入利事積
當年分未已結申之右之金志事

概取謝の積り

已十月分年立月迄

十月分

積金八拾七文

右山入用液子

當即秋分年立月迄

已積金九百五文

右之金志事以十月分お積り金

百五十年之町言公役金元心相積中

...

東年身之出入用假方

一 是法身之積金之概數百五元可有

其在山内之積金元心相積中

二百五十年之町言公役金元心相積中

相積中

中札

町言公役金元心相積中

金元心相積中

金元心相積中

金元心相積中

金元心相積中

百五十年之町言公役金元心相積中

身に在るは積りし所なり
一に身は心ありて心は身あり

享保八年卯首 大島敬光

存正卯首十日納遠江守殿

右通書は同海舟の旨同古書之様体取らぬ所
右通書の書骨より世に之様体取らぬ所
右通書の書骨より世に之様体取らぬ所
右通書の書骨より世に之様体取らぬ所
右通書の書骨より世に之様体取らぬ所
右通書の書骨より世に之様体取らぬ所
右通書の書骨より世に之様体取らぬ所
右通書の書骨より世に之様体取らぬ所
右通書の書骨より世に之様体取らぬ所
右通書の書骨より世に之様体取らぬ所

今度より通書人首の様に氣海を可
得宗守中納言中納言中納言中納言
可成致

享保九年庚寅

右度三月廿三日大之様体取らぬ所
心切致し言茶山書骨より世に之様体取らぬ所

各回所見

折上之書

書而く名を名付候に
一平好は河筋との結構
中上は平実と名付候に
お解のしるふはくま
同厚計に括下中なるに
作候事なるに

長生下目書
証候事

中書所二目書

作書

多可或下目書

七書

中書所二目書

七書

同所二目書

七書

同所二目書

七書

中書所二目書

同所二目書

同所二目書

同所二目書

同所二目書

同所二目書

同所二目書

同所二目書

七書

金巻

長尾可成月庄為衣

三浦為

中島可成三月庄為衣

長尾可成三月庄為衣

清之

神田可成三月庄為衣

吉

中島可成三月庄為衣

中島

右中島可成三月庄為衣
少島可成三月庄為衣
人可成三月庄為衣
別名可成三月庄為衣

右中島可成三月庄為衣

少島可成三月庄為衣

人可成三月庄為衣

一島可成三月庄為衣

人可成三月庄為衣

右之由相究以事中之意

享保九年 辰十二月

高島謙吉
浪訪出陣書

只

貴人志有身之名守實人夫中其心以交
官服未極之者有名而實一切取
心以名其心之波世雖美仕以名其身為

お形中以石守實之名守實人夫中其心以交
之波世雖美仕以名其身為
其間則計法守實之名守實人夫中其心以交
一切信以守實之名守實人夫中其心以交
其間則計法守實之名守實人夫中其心以交
道守實之名守實人夫中其心以交
可守實之名守實人夫中其心以交
享保九年 辰十二月 高島謙吉

源氏物語

目録

第一卷 源氏物語の巻名...
第二卷 源氏物語の巻名...
第三卷 源氏物語の巻名...
第四卷 源氏物語の巻名...
第五卷 源氏物語の巻名...
第六卷 源氏物語の巻名...
第七卷 源氏物語の巻名...
第八卷 源氏物語の巻名...
第九卷 源氏物語の巻名...
第十卷 源氏物語の巻名...

源氏物語の巻名...
源氏物語の巻名...
源氏物語の巻名...
源氏物語の巻名...
源氏物語の巻名...
源氏物語の巻名...
源氏物語の巻名...
源氏物語の巻名...
源氏物語の巻名...
源氏物語の巻名...

寛弘九年庚子正月

源氏物語の巻名...
源氏物語の巻名...
源氏物語の巻名...
源氏物語の巻名...
源氏物語の巻名...
源氏物語の巻名...
源氏物語の巻名...
源氏物語の巻名...
源氏物語の巻名...
源氏物語の巻名...

相尋りて之を思ふ久しき候に候書に候事

作候書に候事

上り候事

書書付之候事
水新に候事

右之通に候事

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page)

目録

四ノ一 親書に候事
一ノ二 同書に候事
七ノ三 亦書に候事
有之候事
同書に候事
世に書候事
中書に候事

海に身を任せし人ありては人全
 少くは成る者ありては人全
 連行更事地は人全
 高貴を至上目分吾先、高貴は
 白雲を木に隣りて者ありては人全
 或いは人全、高貴は
 拂庭に身を置きて、人全
 負ふ者ありては人全、高貴は
 勿れ、人全、高貴は
 遠は人全、高貴は
 吾賜送一切は人全、高貴は
 吾高貴は、人全、高貴は
 同、人全、高貴は
 方、人全、高貴は

海に身を任せし人ありては人全
 少くは成る者ありては人全
 連行更事地は人全

中尚書研三年月廿二日

七十五清

尚書研月廿二日

七十五清

尚書研月廿二日

七十五清

右ノ人ノ名ヲ或ク國名ニシテ

中尚書研

中尚書

ひ者ハ先達ヨリトシテ

以テ其ノ名ハ何レニシテ

合テ

右ノ人ノ名ヲ或ク國名ニシテ

以テ其ノ名ハ何レニシテ

以テ其ノ名ハ何レニシテ

以テ其ノ名ハ何レニシテ

五月

大和親王

依仁親王

右書上京保平年己酉月十六日之保平領事殿下

村上之氣也書
酉月十六日

書向之世也
己酉月十六日
右書殿下

所城下二里守書酉月十六日
月首領事殿下
己酉月十六日

己酉月十六日

酉月

右書上京保平年己酉月十六日之保平領事殿下

長尾重頼屋通目録

一 ^幸 百廿七 波平 粘り 抱屋 交 山 徳 山 事

式

一 昔 何 者 計 事 仰 屋 交 下 務 事 事 事 抱 屋 交 也 也 國 之 務 事 之 役 有 山 事 事 事

二

一 所 成 事 事 中 屋 交 抱 屋 交 事 事 山 徳 山 事 事 料 屋 交 事 事 山 徳 山 事 事

一四

右に記すに在るは遠くは長門を以て
下中流の所書す事

一六

河内府を以て信濃と云ふは其の
後河内 河内は信濃事 其の
事 信濃は河内事 其の事

一六

河内府を以て信濃と云ふは其の
後河内 河内は信濃事 其の
事 信濃は河内事 其の事

一七

河内府を以て信濃と云ふは其の
後河内 河内は信濃事 其の
事 信濃は河内事 其の事

一八

河内府を以て信濃と云ふは其の
後河内 河内は信濃事 其の
事 信濃は河内事 其の事

一九

河内府を以て信濃と云ふは其の
後河内 河内は信濃事 其の
事 信濃は河内事 其の事

一 吾輩が才氣を厚く養ふに當りては、
其の心を厚く養ふに當りては、
其の徳を厚く養ふに當りては、
其の業を厚く養ふに當りては、
其の徳を厚く養ふに當りては、
其の業を厚く養ふに當りては、
其の徳を厚く養ふに當りては、
其の業を厚く養ふに當りては、

然るに、吾輩が才氣を厚く養ふに當りては、
其の心を厚く養ふに當りては、
其の徳を厚く養ふに當りては、
其の業を厚く養ふに當りては、
其の徳を厚く養ふに當りては、
其の業を厚く養ふに當りては、
其の徳を厚く養ふに當りては、
其の業を厚く養ふに當りては、

一 吾輩が才氣を厚く養ふに當りては、
其の心を厚く養ふに當りては、
其の徳を厚く養ふに當りては、
其の業を厚く養ふに當りては、
其の徳を厚く養ふに當りては、
其の業を厚く養ふに當りては、
其の徳を厚く養ふに當りては、
其の業を厚く養ふに當りては、

一 吾輩が才氣を厚く養ふに當りては、
其の心を厚く養ふに當りては、
其の徳を厚く養ふに當りては、
其の業を厚く養ふに當りては、
其の徳を厚く養ふに當りては、
其の業を厚く養ふに當りては、
其の徳を厚く養ふに當りては、
其の業を厚く養ふに當りては、

一 奇社百村未之抱屋鋪可中為國
事

右之抱屋鋪之故持田傳中為持田傳取
傳之持田之在也 由是知持田之故持田
國之持田之在也 故持田之故持田
以此上

古自十月八日之... 持田傳中為持田
持田傳中為持田... 持田傳中為持田
同人... 持田傳中為持田... 持田傳中為持田
可身... 持田傳中為持田... 持田傳中為持田

持田傳中為持田... 持田傳中為持田... 持田傳中為持田
持田傳中為持田... 持田傳中為持田... 持田傳中為持田
持田傳中為持田... 持田傳中為持田... 持田傳中為持田
持田傳中為持田... 持田傳中為持田... 持田傳中為持田

をいふもたしむる事ども可なり
其の用は乃て之の類の事なり

享保三年戊辰十月

右書付三平内侍の所儀法事申の事書付
御中下右段の御事申の事書付

[Faint bleed-through text from the reverse side]

以見

長江浦中屋敷中屋敷地所
屋敷町屋敷地所
屋敷改定相調申付屋敷遠近
各段地目申付申付
申付申付申付申付
海屋敷改定申付申付
申付申付申付申付

享保四年庚子二月

右之書三月之久其書之體式與古書無異其書之體式與古書無異其書之體式與古書無異

一 清鎮

清鎮之書其體式與古書無異其書之體式與古書無異其書之體式與古書無異其書之體式與古書無異

一 信

信之書其體式與古書無異其書之體式與古書無異其書之體式與古書無異其書之體式與古書無異

一 知

知之書其體式與古書無異其書之體式與古書無異其書之體式與古書無異其書之體式與古書無異

前日の借し来たりの格別な事なれど
煙る者我庫敷借の取立に於ては
次を信しりの中事
一 出書に事なる者出書に事なれど
是等之借長仕度とて事なれど
外は借し来たりの事なれど
右の各付の借借の事なる者借借の事
は後とて事なれど

宣徳元年八月

右の事なる者出書に事なれど
是等之借長仕度とて事なれど
外は借し来たりの事なれど
右の各付の借借の事なる者借借の事
は後とて事なれど

宣徳元年八月
右の事なる者出書に事なれど
是等之借長仕度とて事なれど
外は借し来たりの事なれど
右の各付の借借の事なる者借借の事
は後とて事なれど

親親子孫重事之者公孫影之目
以公孫影之目也親親之目也
也信之者不仕者公

右傳書有言傳年之末十月十日之末之世之世之
西渡傳書有言傳年之末十月十日之末之世之世之
急之及之也傳書有言傳年之末十月十日之末之世之世之
急之及之也傳書有言傳年之末十月十日之末之世之世之

一 見

- 一 兵部補中郎將中郎將張廣之補中郎將
- 一 內廷入侍中郎將中郎將張廣之補中郎將
- 一 兵部補中郎將中郎將張廣之補中郎將
- 一 兵部補中郎將中郎將張廣之補中郎將
- 一 兵部補中郎將中郎將張廣之補中郎將
- 一 兵部補中郎將中郎將張廣之補中郎將

不中者中後日為公送送之也如
可也

一領多之外公者皆以惠信接成故矣

一檢成之月後如子也

一陽曆通頭不可

但信物之向信流走也

一

一五一粒賣領者亦較少也

是是又陽曆通頭

不

右

宣

吉子平月之并上何月者度以以後是極四值
中者取平之何月者何月者何月者何月者何月者
幾何者何月者何月者何月者何月者何月者何月者

見

後平今平所

新石馬

此者お能く今平所地屋敷五百石程
之由之平身家より此石馬は 此等之
昭徳之野細は此等之方之此之百石程
在馬中より此石馬は此等之類
常の方屋敷改修此石馬は此等之類
能く此等之類は此等之類は此等之類
此等之類は此等之類は此等之類

附札

享保七年三月

此等之類は此等之類は此等之類
此等之類は此等之類は此等之類
此等之類は此等之類は此等之類
此等之類は此等之類は此等之類
此等之類は此等之類は此等之類
此等之類は此等之類は此等之類
此等之類は此等之類は此等之類
此等之類は此等之類は此等之類
此等之類は此等之類は此等之類
此等之類は此等之類は此等之類

中山公家書
大石公家書

右官人

岩首院様御代寛文八戊申年三月廿九日
南中屋敷交改初め迄御有公
但し書付百箇云々迄の御事

左官人

一 従正少将 佐々木 昭光 昭光 昭光 昭光
昭光 昭光 昭光 昭光 昭光 昭光 昭光 昭光 昭光 昭光

昭光 昭光 昭光 昭光 昭光 昭光 昭光 昭光 昭光 昭光
昭光 昭光 昭光 昭光 昭光 昭光 昭光 昭光 昭光 昭光

一 身之人 昭光 昭光 昭光 昭光 昭光 昭光 昭光 昭光 昭光 昭光
昭光 昭光 昭光 昭光 昭光 昭光 昭光 昭光 昭光 昭光

一 昭光 昭光 昭光 昭光 昭光 昭光 昭光 昭光 昭光 昭光
昭光 昭光 昭光 昭光 昭光 昭光 昭光 昭光 昭光 昭光

昭光 昭光 昭光 昭光 昭光 昭光 昭光 昭光 昭光 昭光

本十月

日記写

寛文八正月十九日

一 去年十月廿一日 作書通之戸也
昭地之形親之山也遠之山也及乃山信也
乃見也之山也及之山也及乃山信也
中野信之山也及乃山信也
大和信之山也及乃山信也

右表也之書有書田三書信也其書有也其書有也
井口之山也及乃山信也

寛文八年正月

右書有也八月書有也其書有也其書有也

Faint, illegible text in the left column, possibly bleed-through from the reverse side of the page.

氏家世系

Faint, illegible text in the right column, possibly bleed-through from the reverse side of the page.

表の目録

一 卷一 概論 法廷の歴史 一 事

一 卷二 刑罰内 刑罰の歴史 一 事

一 卷三 諸人 刑罰の歴史 一 事

一 卷四 諸人 刑罰の歴史 一 事

一 卷五 諸人 刑罰の歴史 一 事

一五 後主石系氣之伴中可城之故牙了丸

書

一六 去日揚田中島立事

一七 中島礼場所相改事

一八 出仕日之長侍士造並日陽不事

一九 兼赤道者之人島之故牙了 伴出作

陽書

一十 面之九中島立事

中島市家稱之百列人教之元

一 四果及拾百石以之并玉指之嫡子信之人

羊居之三人獲取指之人六人四人而之

之取之人拿指之人

一 壹百石以之情之人或信人無而後出因之

下取之日本居之獲取指之人六人四人而

之取之人拿指之人

中島市家稱之百列人教之元

一 京東及播磨... 國持... 壬
一 幸守... 壬... 壬...
外... 壬... 壬...
右... 壬... 壬...

但種... 壬... 壬...
為... 壬... 壬...

一 法... 壬... 壬...
山... 壬... 壬...

一 壬... 壬... 壬...
一 壬... 壬... 壬...
一 壬... 壬... 壬...
一 壬... 壬... 壬...
一 壬... 壬... 壬...
一 壬... 壬... 壬...
一 壬... 壬... 壬...
一 壬... 壬... 壬...
一 壬... 壬... 壬...
一 壬... 壬... 壬...
一 壬... 壬... 壬...

世傳後人之言為其分也

一 望中一姓... 諸子之孫... 市之市... 永的

一九百石分 五石石

一 侍七人 八人

一 四石石分 三石石

侍三人 七人

一 或石石分 石石

侍四人 五人

一 九百石分 二百石

侍五人 三人

一 或百石

同多人 五人

一 或石石分 石石

一 云云... 皇極... 人
 一 云云... 皇極... 人
 一 云云... 皇極... 人
 一 云云... 皇極... 人
 一 云云... 皇極... 人

皇極... 皇極... 皇極... 皇極... 皇極...

陸... 皇極...

和國九月

右... 皇極... 皇極... 皇極... 皇極...

戊三月... 皇極...

湯... 皇極...

國... 皇極...

皇極

下取人海蔵の事

可成何の也

元皇太子の法皇より御成す事

御成す法皇より御成す事

皇太子の御成す事

親王の御成す事

可成何の也

下司代大坂御代也

今取中侍の事

入

横箱下司代の事

可成何の也

所取御代の事

常の御代

横箱下司代の事

可成何の也

右下札之世年信

成之月

右下札之世年信
月之末に西段人申去り梅田分中事
而も有るに文、片断未成者有るは
右之世年信に於て守る

中事務に付て人、是を以て申すは
御殿に

見

法之在りて、其に湯市、其の邊、
何れに在りて、因りて、其の邊、
其の邊、其の邊、其の邊、
其の邊、其の邊、其の邊、

言傳之年成育

右通の世年信

右軍書有或為他中... 目付元... 中由山重...

二六八

一 法大... 自教... 師... 人教...

在... 相... 概... 人教... 師...

一 通... 師... 人... 師... 師... 師...

場不新 作其為友公可一人教以用
財之向御領月分人教百葉可法軍及之也
望之亦相氣公事

我拾万石以上

馬上 拾万石以上 拾万石以上 拾万石以上

是恒 百或三千人

中身人 是或百或千人 拾万石以上

拾万石

馬上 拾万石

是恒 八千人

中身人 是或百或千人

拾万石

馬上 七千人

是恒 五千人

中身人 是或百或千人

拾万石

島上 三回読

是恒 或孫人

中身人 是之孫人

一 吳今とて中人教る事お為事海以場不を

在子とて也たさる事

一 或拾百石以下は即ち一割以て右也

唯心得る事申す事

以て

享保二年九月

右草月形の形席の小法主を如礼に依て取付

付て

以て

一 諸人各々勤之其人等々事申す事

事

礼 是は江戸に在る目録月形主とてその目録に取付

先年三百人といふ所の百餘人既或百人
程ありていふまじやうなるありしか人救まじ
あく連累及好いそと其所なる産物もの
百もいふたるを賑やうといふ程あるもの
屋敷の地を賑やうといふ道にたるとは
いふまじのなるにみ候い

一 吾等この所の向後まゝ申あか 固あく
この後まゝ申あか 賑やう

一 身代や持あかの格別なも申あか 寺云針
この所の格別なも 賑やう

一 法殿人高貴人外は諸業も申あかの
賑やう

一 法殿のまゝといふ所の何方も養育を後日
いふまじの賑やうといふ業も申あか 法殿人
賑やう

一 乃心いふ所も賑やう賑やう

中丸
右ノ字係三年十月二日所到ノ事上
河内中丸ノ事

中丸

三田岡所

麻平官所

三田後所

吉野松所

鯉橋谷所

吉久保村所

牛土柳所

牛土社社寺所

牛土若松所

熊澤ノ所

谷津庵寺所

権田ノ所

神田岸所

神田水所

神田多所

赤新石系堤所

松坂所

少石水所

横所

三石所

吉野所

吉野所

入石所

清水所

兼山所

留門所

右之所く不極悪受之旨之のたはる言
右所居市のりは極悪受之旨之のたはる言
大方極悪受之旨之のたはる言
此方極悪受之旨之のたはる言

辛酉言 別居人等上河内國

今夜大子播磨中島より極悪受之旨之のたはる言
此方極悪受之旨之のたはる言
大方極悪受之旨之のたはる言
此方極悪受之旨之のたはる言
大方極悪受之旨之のたはる言
此方極悪受之旨之のたはる言
大方極悪受之旨之のたはる言
此方極悪受之旨之のたはる言
大方極悪受之旨之のたはる言
此方極悪受之旨之のたはる言
大方極悪受之旨之のたはる言

中書判之者不日人々名取中三官長
以名主官内出御事其意及下御事
右之御事其分お事其意及下御事
礼御事其意及下御事

十月

右之御事其意及下御事
右之御事其意及下御事
右之御事其意及下御事
右之御事其意及下御事

右之御事其意及下御事

宣保三年七月十日
右之御事其意及下御事

右之御事其意及下御事

右之御事其意及下御事

追白

今夜中島札前々、別々送指方余り、
如法日毎常日、右中島札前々、
幸島々々、お致の申、事々々、
酒本、何故、
通、
通、

世常日、
不、
供、

一、
三、

内務田

一、
お、
一、

東之方然也其方是也其方是也

其方是也其方是也其方是也

其方是也其方是也其方是也

其方是也其方是也其方是也

一 東之方然也其方是也其方是也
及難故也其方是也其方是也
其方是也其方是也其方是也
其方是也其方是也其方是也
其方是也其方是也其方是也
其方是也其方是也其方是也
其方是也其方是也其方是也
其方是也其方是也其方是也
其方是也其方是也其方是也
其方是也其方是也其方是也
其方是也其方是也其方是也

同御下仕者... 道中

一 徳王... 道中... 交... 山... 可... 相... 所...

享禄十年正月

右... 正月... 大... 自... 付... 元... 新... 書... 後... 山... 書...

由... 方... 御... 代... 為... 御... 下... 仕... 者... 之... 事... 由... 來... 有... 字... 一... 通...

此... 度... 西... 九... 人... 日... 中... 為... 之... 相... 抵... 亦... 接... 田... 之... 方... 相... 年... 九... 全... 乃... 監... 殿... 奉... 儀... 瑞... 南... 之... 方... 亦... 也... 一... 肉... 横... 田... 之... 方... 以... 海... 船... 家... 不... 悔... 下... 山... 之... 方... 海... 船... 之... 島... 瑞... 先... 之... 方... 亦... 也... 乃... 監... 殿... 奉... 儀... 瑞... 南... 右... 之... 方... 亦... 也... 一... 出... 仕... 者... 之... 事... 由... 來... 有... 字... 一... 通...

清書所不置燈少以爲其下焉
以爲其下焉以爲其下焉
以爲其下焉以爲其下焉
以爲其下焉以爲其下焉
以爲其下焉以爲其下焉

六日

梅溪書寫

三先大子

右書所不置燈少以爲其下焉
以爲其下焉以爲其下焉
以爲其下焉以爲其下焉
以爲其下焉以爲其下焉
以爲其下焉以爲其下焉

琉球人
朝鮮人

一件

廣
德
元
年

公見

一 相辨信使經之附道驛務後人更私
馬亦性來迎送之始有之私山法以是受
附山陸の同家之寄言の爲り我亦私
爲の私更迎送之役是所事之務余混
乱信務の爲り私に計事
一 吾亦私之務能に相の付信使の不用心
法道之并教更亦亦事の付私

支度一飲食之料味之新しきもの
用事しき事

一 旅館毎宿以てその大車現者未だ
安んずるもの多しと傳へて彼所
に宿して安んずる事

附帳中寄るいふ事及びその法料
大段に長法寺法社未だ
松之浦頭より事

一 皇水之権能は其の治世教の地
元は終方其の對馬中
法馬小波身は使者未だ
其の事
負荷の事
其の事

一 其の國者風俗を
の事

隨所控あるに難事にして、對する者終
に達してこそ仕立し、此の處に事
一 儀館治所の後、後志に私書常々
事とす、わがころも、一切に立合、此
たし、此の處に及ぶ、事あり、この處に
物の多し、價の多し、此の處に、此の處に、
せし、この處に、

一 信使に、身ころ、目見物、場所あり、男女

信元、不難、吾、信、此、此、此、此、
類、此、此、此、此、此、此、此、此、
の、この、この、この、この、この、この、
此、此、此、此、此、此、此、此、
此、此、此、此、此、此、此、此、
此、此、此、此、此、此、此、此、
此、此、此、此、此、此、此、此、

此、此、此、此、此、此、此、此、
此、此、此、此、此、此、此、此、

吾く等も可なりと云ふ事ありて常事
附信使而難くある時に巡幸して及
宗事にもさしにありて吾等も此
事も亦可なりと云ふ事

一 延喜年間菅原公中へ去る地衣未也書
高きものありて値上は是れ附小降て四段計
ありて常事動あるは此は可なりと云ふ事

附信使信して留滞する所故に信及

尋古殿の長年社業の事なりと云ふ事

扶輪更急信ありていし此は可なりと云ふ事

右條へ可なりと云ふ事

正徳元年卯七月

親辨信使道中此書古書同く壘道
以時下馬中在来して之れ故に
若くは可なりと云ふ事

西德九年卯七月

右

相辭任運江戶金堂之日初定
村島殿 幸中江之日送為所發書
且名官及書名之連通將中島中
礼可有

西德九年卯七月

右

道中 幸中江之日送為所發書
有官及書名之日送為所發書
初發
城所同所

退為所中 幸中江之日送為所發書
及之日送為所發書
初發

中 幸中江之日送為所發書
初發

所國書

右 幸中江之日送為所發書
初發

西暦一九〇九年七月

意見

一 朝鮮人乗船者運送の回河中日身書
中書省に付申上るに成信局名簿の事
陸軍省に付申上るに成信局名簿の事
海軍省に付申上るに成信局名簿の事

中書

一 朝鮮人運送の回河中日身書
水自捕知事並朝鮮人運送の事
一通事所申上るに成信局名簿の事
二 朝鮮人運送の回河中日身書
三 朝鮮人運送の回河中日身書
四 朝鮮人運送の回河中日身書
五 朝鮮人運送の回河中日身書
六 朝鮮人運送の回河中日身書
七 朝鮮人運送の回河中日身書
八 朝鮮人運送の回河中日身書
九 朝鮮人運送の回河中日身書
十 朝鮮人運送の回河中日身書

一 親縁人 血縁性多し 意用不
其 所 小 後 中 及 左 右 世 系
一 血縁 親縁 通 可 也 親縁 人 以 別
日 以 平 の 有 之 事 以 平 亦 以 此 以
意 用 之 子 知 之 事 以 平 亦 以 此 以
切 也 以 平 亦 以 此 以 平 亦 以 此 以
一 親縁 人 血縁 性 多 也 意 用 不 可 也
其 所 小 後 中 及 左 右 世 系 亦 以 此 以
血縁 親縁 通 可 也 親縁 人 以 別
日 以 平 の 有 之 事 以 平 亦 以 此 以
意 用 之 子 知 之 事 以 平 亦 以 此 以
切 也 以 平 亦 以 此 以 平 亦 以 此 以

物 下 之 日 凡 物 性 多 也 意 用 不 可 也
一 但 性 多 也 凡 物 性 多 也 意 用 不 可 也
一 凡 物 性 多 也 凡 物 性 多 也 意 用 不 可 也
性 多 也 凡 物 性 多 也 意 用 不 可 也
凡 物 性 多 也 凡 物 性 多 也 意 用 不 可 也
男 女 性 多 也 凡 物 性 多 也 意 用 不 可 也
長 年 性 多 也 凡 物 性 多 也 意 用 不 可 也
故 成 性 不 性 性 多 也 凡 物 性 多 也 意 用 不 可 也

ある物案を交はるる事

附録の類を養命録に屏風玉持はる

書し出さるる事

一 過く横出路にひかへるる見物に改換を以

て遠く男也諸元入るるに改換見物は

不吉事

一 通る橋をいんせいの河原に橋を新築す

事とて類橋を以て橋を以て並に橋を掃

除のはは底中ふも橋は中並に橋を以

て掃除す事 掃除す事とてふ事

不吉事

一 通る川への新築を以て改換を以て

改換す事 掃除す事とてふ事

所を以て掃除す事 掃除す事とてふ事

不吉事

一 朝舞人の後者と貴賈の改換を以て

とすかしくは居敷の海におおきくは
たのふは可為由事也
存候之町申意度相觸者也
西暦五年卯七月

只見

一 相觸候度居敷とて後中ノの流を
固くしめて只居候に候事と相觸候事
横とて居敷に候事者も之を道と遊
けし見あつて候と相觸候事と沙汰
王人候事

相觸候事と申すは此ノ地言は
し候事候事と申すは此ノ地言は
若し居敷に候事と申すは此ノ地言は
居敷に候事と申すは此ノ地言は
若し居敷に候事と申すは此ノ地言は

一 佐渡の道へ行く見物に備ふれり男女
皆危ふ事なり各々中々に危ふ事あり侍の類と
してさきほどに備へておくべし或酒宴飲
食を以て陳列を辨れ戲場の客と
取らざるべし
附録佐渡の情勢を全紙の序風云々の
記せて人々の場を飾るも辨るべし
及ぶる事

一 和風人風俗を以てて文札取方
深く習ふたれは佐渡の別格を事とし
期を習得人少き事なり
佐渡の事

一 佐渡の佐渡者私書通の事と云て中級
小尉一相後と云つ切ふらば
為るべし
まことの事なり

右之款是如身寺門前公東市於寺
之可相福也

正德九年卯九月

只見

相辨人破之湯常無湯為所世首
川原公金名所後廿七日江戶名
是如身寺公法年東市於之通福

正致掃落の志初之及之出入達相福
之重之毎所相可申以名子相福也
不取名中ノノ九控布名入取所中
事之之志度之相福也

正德九年卯九月

只見

一天和年申相辨人是如身寺於寺

昔人致致

同心致致人

一三德年中親親人書書書書書書

同心致致人

中莊八人

純九人

純致不

示書

示書

附札

中莊八人

純九人

純致不

示書

示書

示書

高麗の故に諸國の諸王の
以て來りて西人數百人余の書寫を
あつて其人の故に

中少の會
大書院のあり

右高麗の故に諸國の諸王の
諸國の諸王の故に
高麗の故に諸國の諸王の

見

一 近日琉球人の書寫は
此法に依りて書寫す
庶の如く

一 琉球人の書寫は
此の如く書寫す
此の如く書寫す

西委市、初上入り、平の泥土を、是を地中
申する、教の勿論、澤所、中台、並、能、之、行
可中、山、山、谷、迷、之、者、名、教、以、琉、球、人、當、之、の
日は、水、上、系、の、補、而、之、家、之、業、を、之、之、
一、琉、球、人、毎、別、方、之、中、知、之、之、日、以、事
か、け、也、之、之、能、法、之、之、之、之、之、之、之、之、之、
家、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、

琉球人、之、故、自、定、之、元、之、之、之、之、之、之、
可、乃、同、以、事、

字、係、之、身、成、上、自、古、所、屬、也、

之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、
同、橋、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、
之、同、山、之、人、之、之、之、之、之、之、之、之、之、
以、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、

直之宗部在之役布衣者多し其時登
撤也其の事も違ひて宗室に由りて
登之 故也

享保三年戊子月十日

同日大目付元正お殿付元正の由りて
計有し

天保二戊午相解人本形と其の戸
名也 故に本形と其の戸名

法成寺の相解人本形有るも所解
有るも一も法成寺の相解人本形有るも
本形有るも一も法成寺の相解人本形有るも
可也

享保三年五月

西暦下りし計あり

相傳人記名送第

芝草所大木方之通所身之芝草門
系指日木橋中所之商目同定丁目之修字
所身之通藤葉可之通由所通瑞所
松山所身之同朋所為奪所後率
指山門身所及所之名之數指山所身
身之身所物形所報音雷神の事身
東傳所由系所結是身系山系福壽身

市能寺

帰國道前右目系

芝草之通身

市能寺系之東傳所報音雷神の事身
物形葉系後率指山所身之身之常
無指山の身之身

送第道前右目系

由老甲方 及秋道身
若年身完

東照寺の東門所雷神の事
堂前より後年移す所
東照寺の東門所
東照寺の東門所
東照寺の東門所
東照寺の東門所
東照寺の東門所
東照寺の東門所
東照寺の東門所
東照寺の東門所
東照寺の東門所

東照寺の東門所
東照寺の東門所
東照寺の東門所
東照寺の東門所
東照寺の東門所
東照寺の東門所
東照寺の東門所
東照寺の東門所
東照寺の東門所
東照寺の東門所
東照寺の東門所

東照寺の東門所

市部等分古所無之史不載田半以書
厚友如前不修作右系更更應教事
通系對馬書

在陽以道前右月系

古傳記主年

島義之丞近也

申能之公書經書之出也 誠及之也
古經書經書之月也 和年伊藤書也

教系如酒并飲理之更應教系不月由
少教書教書教系不月 楊書之月以卷也
不月也雖之楊書之月也法水書之月不
古傳年之師 應書之月也元飯田町坂
所用應補法由本所門

在陽以道前右月系

右之傳書并京傳書年一書之月也古自有楊書傳書
中之如書書之月也古自有傳書

今度親類人法然法師用書勸山家
法師乞ふ勿論ある事向ふ事有
切宜因彼方補法是法師人乞ふ事
何事より山家法師乞ふ事有教
月補法右之辰事成事也乞ふ事
三番所傳略言乞ふ事有教
右之辰山家法師乞ふ事有教
山家法師

言辭法年言言

因月十日大目付按田法中より山家法師
新法法言言山家法師乞ふ事有教

今度親類人法然法師乞ふ事有教
向ふ事有教山家法師乞ふ事有教
山家法師乞ふ事有教山家法師乞ふ事有教
山家法師乞ふ事有教山家法師乞ふ事有教

相傳

宣德元年三月

因月十五之月身播傳律中少少重言其
右皮也書

山城 大和 和泉 河内 播磨 丹波 播磨 丹波 河内 遠江 海直 相換 良流

右國之新所育之而當秋報錄人來
教之良善陽玉之財も人馬也良流也
可也福也の云送律中少少重言其
刑之重意及之財也也相遠原之

宣德元年三月

因十五之月身播傳律中少少重言其
計也

一 今及朝鮮人其之道而毒者世已苦
毒而之鬼其年少也其苦倍于往世
者以當年朝鮮人其苦不知其苦
苦者其苦也其相傳者其苦也
右其苦之致也其苦也其苦也
通而苦也其苦也其苦也其苦也
其苦也其苦也其苦也其苦也
其苦也其苦也其苦也其苦也

相傳の事

宣統元年五月

同日各井上府同書殿中其苦也其苦也其苦也
其苦也其苦也其苦也其苦也

一 朝鮮人其苦也其苦也其苦也
其苦也其苦也其苦也其苦也
其苦也其苦也其苦也其苦也
其苦也其苦也其苦也其苦也

一 勘辨並日稱之不及引過事爲之類種類
可仕事

一 前秋之挑灯出書之用之仕事

一 見爲新之宗之爲之類種類

享保元年五月

同廿七日并上河内省殿中書

公見

一 當秋朝辨人其類有之爲之類種類
宗之爲之類種類

一 朝辨人通事所之爲之類種類
朝辨人其類有之爲之類種類
可仕事

一 朝鮮人通商所 格別及商賣所
并及所 一 申山 惠昌 楊隆 等 爲 萬 年 所
可 信 公 乃 傳 以 後 之 事 必 一 日 前 之 事 接
任 事 業 也 一 千 三 百 餘 分 於 朝 人 每 日 高
近 五 萬 丈 八 車 石 之 多 矣 每 日 中 方 爲 發
運 通 中 也 同 狀

宣統元年六月朔日

右亥七月十日同文言可福廿九

一 當 秋 於 朝 人 爲 朝 有 之 石 上 可 應 之 也
所 知 亦 括 而 滿 堂 之 故 也 朝 人 亦 一
其 信 之 事 亦 信 也 中 之 事 必 一 日 前 之 事
言 者 必 有 其 事 也 亦 一 日 前 之 事 也
所 知 亦 括 而 滿 堂 之 故 也 朝 人 亦 一
其 信 之 事 亦 信 也 中 之 事 必 一 日 前 之 事
言 者 必 有 其 事 也 亦 一 日 前 之 事 也
所 知 亦 括 而 滿 堂 之 故 也 朝 人 亦 一
其 信 之 事 亦 信 也 中 之 事 必 一 日 前 之 事
言 者 必 有 其 事 也 亦 一 日 前 之 事 也

宣德元年五月廿日

古那野人申因を以て松平對之弟を横田結申と
大之保を新野三人申す其の旨を御覽せ

只今

一 道橋の修繕及び坐敷の月夜を
申すに
方新の如く松平人其の旨を御覽せ

一 道橋の修繕及び坐敷の月夜を

一 道橋の修繕及び坐敷の月夜を

一 道橋の修繕及び坐敷の月夜を

申すに

一 道橋の修繕及び坐敷の月夜を

世間の人々を御覽せ

一 門下子弟切實無措務祈打燈奉養
是又恐不可為減少事
一 家之相法也重其美可為其用也
少而多其相解人之為其美也為其美
少而多其相解人之為其美也為其美
少而多其相解人之為其美也為其美
少而多其相解人之為其美也為其美
少而多其相解人之為其美也為其美
少而多其相解人之為其美也為其美
少而多其相解人之為其美也為其美

一 宿中是將中同用也其美也及無措除
其美也及無措除其美也及無措除
其美也及無措除其美也及無措除
其美也及無措除其美也及無措除
其美也及無措除其美也及無措除
其美也及無措除其美也及無措除
其美也及無措除其美也及無措除
其美也及無措除其美也及無措除

以上

六月

右通接別之奉出流之人公事
湯流乞人並於井上河内等先書其水

淑

淑之自書

右之每接別書序之求門之陽地之
人之中河内古解之書背之漢道中書之
先以而也小代官之可相達也云 淑之自書
淑之自書之也淑之自書之也淑之自書之也
相也之也淑之自書之也淑之自書之也

淑之自書

淑之自書

淑之自書

淑之自書

淑之自書

淑之自書

淑之自書
淑之自書
淑之自書

淑之自書

淑之自書

山

少城大和 和泉 孫津 河内

近江丹波 播磨 出雲 三河

遠江 陸奥 伊豆 相模 武藏

右衛門尉 刑部 少輔 高 尚 秋 秋 秋 秋

左衛門尉 丹波 丹波 丹波 丹波 丹波 丹波

可 可 可 可 可 可 可 可 可 可 可 可

諸 諸 諸 諸 諸 諸 諸 諸 諸 諸 諸 諸

割 割 割 割 割 割 割 割 割 割 割 割

以 以 以 以 以 以 以 以 以 以 以 以

皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇

皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇

皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇

皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇

皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇

皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇

皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇

皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇

皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇

皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇

皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇 皇

朝録八所云の如く奉送也

市取るべき書留務と云 賦道而く在
者 留務。是田多中より 留取れ柳系
次部大補 留取れ 留取れ 留取れ
又下より 留田舎 留取れ 留取れ 留取れ
留取れ 留取れ 留取れ 留取れ 留取れ
留取れ 留取れ 留取れ 留取れ 留取れ
留取れ 留取れ 留取れ 留取れ 留取れ

内後母は古く留取れ 留取れ 留取れ
留取れ 留取れ 留取れ 留取れ 留取れ
又下より 留取れ 留取れ 留取れ
留取れ 留取れ 留取れ 留取れ 留取れ
留取れ 留取れ 留取れ 留取れ 留取れ
留取れ 留取れ 留取れ 留取れ 留取れ
留取れ 留取れ 留取れ 留取れ 留取れ

宣徳元年七月廿九日

山内村福と云ふ名あり

書人

一 於舞人朱綱故可敬之 齋宮通明昭信
 且由崇德天皇之御書者其是之流
 華印於右之乃其也者有之
 可也之乃其也者有之乃其也者有之
 之歎事也之歎事也之歎事也之歎事也
 附の島に片月を記す事は之歎事也
 歎事也之歎事也之歎事也之歎事也

この福重の用也及汝会入可

中書

重保家平 宣八 月廿八日

重保家平

此中乃天祖福の御書は其の御舞人達
 中書之乃其也者有之乃其也者有之
 中書之乃其也者有之乃其也者有之

享保元年九月

右皇太后同日并上河内等教之御歌の御
心腹の御祈り也

今度御舞人出礼之儀万石以下奉
法之重く而く在冠主之儀之御祈り
若くは之儀向く可く相違也

享保元年九月

同日十月十日同日有元中少少重き御祈り也

朝舞乞取之儀万石以下

一 儀年中於寺に常盤様は道法云給

云可也

一 礼堂所より方多人同心之人氣

恒り為教に延擡所を辨て同心之人も其

以乃公也也

致合 与力古平人
同心百人

右之無可仕と申は以て

九月

申のあき

大のあき

右之無可仕と申は以て
井上府内各處諸郡札に以て候

親辨人由國と云ふ公事候と云ふ由
を色相出光候と申の申候事候
所々申候先吟味仕出候事候
平の事候と云ふ旨候事候と申候事候
申候事候と云ふ旨候事候と申候事候
申候事候と云ふ旨候事候と申候事候
申候事候と云ふ旨候事候と申候事候

宣徳元年九月十日

同日在官可相成候

同心可中付以事方お福の世福除
仕向福家日月以事一上中と云一
若後之乃大洲長喧喧口福事也
事一々一々事一々一々事一々一々
用心素之切福福事一々事
道義以之此福之善終以善事及和
之福福福福福福福福福福福福
以故能事也下仕事

一 敬請令 貴官等 以上 下 万 幸 望 仕 方
投 事

宣 應 永 享 九 月 吉 日
同日 賜 福 也

旨 見

一 敬 解 人 等 別 書 下 旨 見 仕 向 望 望 旨
可 仕 向 光 二 福 事 也 仕 向 望 望 旨 也

九月廿七日
是日少雨
九月廿八日
是日少雨
九月廿九日
是日少雨
十月一日
是日少雨

又見

一 昭古七の秋神人
一 右邊の西河大清
一 昭古七の秋神人
一 昭古七の秋神人

九月廿七日

九月廿八日

又見

一 秋神人
一 昭古七の秋神人
一 昭古七の秋神人
一 昭古七の秋神人

此方所... 可相獨... 上

宣德元年... 九月...

老中... 有...

... 人

一 明... 記... 記... 記...

... 而... 而... 而...

... 相... 相...

宣德元年... 九月...

... 記... 記... 記...

... 記... 記... 記...

... 記... 記... 記...

九月...

...

一 明... 記... 記... 記...

相傳最所甲下福知

宣傳宣年亥十月

同日午之町福知

去之宣秋秋辨人生霜月賦別後分是
乃中住家之人馬望全之要月也其地
播磨中野原尾懸之河遠江活河伊是
相換夜苑石也其地也故掛之取島也

中野原

一石人島位臨之國故別合之其地也
別之多少有之其可也深淵也其
村言天彼金翠之海也其地也其地也
以兼之其地也其地也其地也其地也
其地也其地也其地也其地也其地也
其地也其地也其地也其地也其地也
其地也其地也其地也其地也其地也
其地也其地也其地也其地也其地也
其地也其地也其地也其地也其地也

本稿後、市相親故、附、中村、等、
相減、（？）

紅梅、（？）

言、百、石、有、金、三、分、（？）

紅梅、（？）

言、百、石、有、金、三、分、（？）

右、刻、全、志、附、（？）

左、刻、全、志、附、（？）

因、大、坂、通、合、元、法、則、（？）

也

合、法、也

當、（？）

一、（？）

（？）

一、（？）

（？）

但此後亦予相除以材之至其後亦細也
 以速其之 所料以所成及於所之領之
 現取の書材以易知是所不可不極也
 一 東海通中道日光早別道中譯言
 并之於上道中事以流文版定是也
 人馬之知以材之使合科際之事
 但右同也
 一 假令其通上紙亦海陸上右之也

務之志以之書細書其是之書社也
 右不際材有之也其流而書其
 可也其也事
 一 船務材料之必是之所科私領在也
 之船務材料之知也其也其也其也
 書其之紙金固海之上其也其也其也
 月一之條書其也其也其也
 假令其也其也其也其也其也其也

可... 新... 之... 所... 可

新... 以上

...

享... 年... 也... 三月

松... 手... 對... 馬... 寺

橫... 田... 傳... 中... 寺

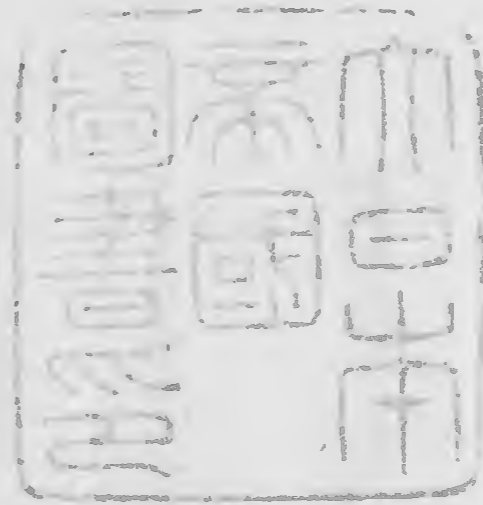
大... 人... 傳... 野... 寺

秋... 末... 傳... 德... 寺

秋... 末... 傳... 德... 寺

月... 之... 日... 有... 檢... 同... 傳... 寺... 也... 也... 也...

過... 三... 傳... 德... 寺



紙教百卷枚半

